

し鑛滓は出てさりきといふ。次回よりの出銑は熔銑及び鑛滓は全部之を鑛滓口より出すことゝせり。第八日目には鑛滓口と同一面に於て出銑口の上部に新しく出銑口を穿ち、之より吹止め迄熔銑及び鑛滓全部を流出せしめたとも、之れ以上に爐床は隆起せさりきといふ。其際得たる熔銑は爐の裝入を變更せざるに係はらず白銑なりといふ。

之を要するに、本報告に掲載せるものは其實験の期間大概ね短時日に留まるものなるも其の得たる結果の大要を擧ぐれば左の如し。

一、爐に裝入する調合材料に於て大凡そ酸化チタン二〇%以上を含有することを好まざるか如し。
一、チタン多き調合に於ては爐底の高まる爲め採作上に不便を來すこと。(大正九年六月二十四日)

日本刀の疵に就て

(東京帝國大學工學部日本の研究室報告第二十三)

太田 熊太郎
福田 瑞二

疵の意義

刀劔の疵は廣義に云ふ時の疵と狹義に云ふ場合の疵との二種類に大別することが出来る。

廣義の疵とは即ち鍛鍊不足のものと焼直し物とか云ふもので其疵は其刀身全部に渡つてゐる所のものである。夫を見出すには鑑刀上の幾多の経験がなければ至難である。

狹義の疵と云ふのは鍛鍊の折乃至焼刃の節に自然的もしくは刀工の不注意に基因して出来たものと實戦に使用した結果出来たもの等を指すので此等の疵は皆共に部分的で何等かの形をとつて居る。

疵は其種類により又は夫の位置等によつて實用上に害のあるものと別に大した害の無いものがある、今夫等の鑑別取捨についての説を三四の刀劔書から抄録して参考に供する。

第一廣義の疵

イ、表に見えざるもの或は地鐵鍛鍊の粗惡なるもの

ロ、わかきもの

ハ、はうじもの

ニ、湯ちがひ

ホ、ほやけもの

こゝに引用した刀劔書から歸納すると廣義の疵の中には上記の種類があることになる。

イ、表に見えざる疵については撰刀記に

表に見えざる疵ありて研を重ねて出ることありこのものは絶て知り難し又表に見えざる疵にてさらふべきものあり力なく弱きものあり又押すにたそみかねて強すぎたるものあり疵は表に見ゆるもののみ疵にはあらず折やすきもの曲りやすきものかけ損ずるもの刃のこぼれやすきもの刃業あしきもの形あしきものなどとり／＼疵なればよくえらびて疵ありともまことの疵なきを帶すべし又肉置のあしきも疵の一つなり反の深すぎたるも反なきも共に疵なり云々。

と所謂表に見えざる疵の説明をして居る又刀劔或向に

疵の大なるもの七つあり鍛粗く無垢に作て深か焼刃一つの疵なり金剛くして荒沸多き二つの疵なり此二つの疵を兼備たるは最疵の大にして害の甚しきものなり又金の柔き一つの疵なり垢心を入れたる二つの疵なり焼刃至て淺き三つの疵なり皆曲り易く不利の疵なり此三つの疵を兼備たるは疵の甚しきものなり云々。

と云ひて其地鐵及鍛鍊の粗惡なるものを疵の大なるものとしてある。
口、わかきものは新刀銘盡卷之一に

わかきものの事第一うぶ刃といふ事あり是は刃の足先に黑色に雲などの如くなる物上にうきて有次第に古くなる程あつるものなり又地色白け汁なくかわき刃には汁あり青みさしうきやかに白く刀はせず刃にえもよごれたる様にうるみたる所もあり又はせやかなる所もありて刃境にほひなくきわ立て見ゆるものなり去年上手の打たる程右の心少なしされども少なりともかたぎあるべきものなり。

新刀辨惑錄二に

若キ物見方打立ノ新身ハ地色ニゴリ刃モ白クハゼズシテ沸杯モヨゴレタルヤウナル所モアリ又ハゼタル所モ多シ村有リテ匂ヒアレドモ黒クホツレタルモノナリ上手ノ打タル程右ノキツカケ少キモノナリ相傳ニモ凡百年ヲ過グルモノハ火氣去テ正氣ニ歸スト云ヘリ又砥數ヲ數度歴ルト歴ザルトニ因テ見分レ差別モ有レバ其所ヘモ心付テ目利スベキコトナリ。

尙此他に秘傳書下卷解粉記刀劔雜話等にも殆ど之と同じ事を述べてあるが略すこととする。

右のわかきものの説明はあまり抽象的で文面だけでは充分其云ひ表さんとした所を解しかねる。或は打卸當時の刀は素延火造又は焼入(焼刃と云ふ共)等の作業時の加熱によつて刀の表面が何分か脱炭し其爲表面には充分焼が入らざるも脱炭せざる心部には焼がよく入ると云ふ様な事でもあれば自然沸匂等も判然しない譯であらう然し年をへて砥數を重ね其脱炭した部分がとれればはじめてあきらかになると云ふ風に解釋すればされぬ事も無いが暫く疑問に付して置く。

ハ、はうじもの、ニ、湯ちがひ、ホ、ほやけもの等についての説は既に焼直し物に就ての報告中に紹介してあるから省略する。

第二狹義の疵

い、シナヘ

撓、靱

ろ、フクレ

脹

は、刃ガラミ

刃藁、刃絨、刃棚

に、地荒

ほ、地鐵ワレ

へ、ムメガネ

埋金

と、石氣

ち、スミゴモリ

炭籠り、墨籠、炭入

り、烏口及烏ノ口

ぬ、月ノ輪

る、ハゼ

を、シミ

染

わ、刃キレ

が、匂キレ

よ、ハサミ出シ

た、焼割及焼クヅレ

れ、矢目

そ、切込

15 表に於て「い」より「り」迄は鍛錬の折「ぬ」より「た」迄は焼刃の時「れ」「そ」の二つは戦場にて出来たものと云ふこ

となる、この分類は大體下記する水心子の劔工秘傳志を本として其他を參考して分つたもので尙研究の餘地は充分あるものである、今夫等の疵の取捨の説をあげるのであるが其前に疵の成因に關する説、新古刀の疵の可否及地刀の疵の可否を説いた論をかゝげる、そして一番最後に疵をかくす事に就ての説も抄く。

疵の成因

劔工秘傳志卷之下に

一、疵は鍛の内にも焼刃の節にも出来る也地荒石氣炭入何れも鍛の節合に泥糟又は炭の粉入りて滓合さる也。

一、撓は鐵の滓過る所鈍強く當りて打切たる也最も一體鐵性堅過たる物しないと成事也又柔かなりとも滓過る時は撓出る也又をろし鐵などの撓出るは多分鐵の煉ざる所有る故なり依て古刀から上作と云へども煉れ惡き所有る作は撓と成りたる有り然ども古刀にも數遍鍛ゆる時は善き所も惡き所も交り合ふ故自ら撓も出でずして無疵とは成れども一體鐵の位は鍛ひざる者には劣るなり、下略。

一、ふくれ、是も鍛の節合口の窪き所へ風を含みたる也、下略。

一、切先宗の方刃の所の堅割目の輪刃切れしみ此分は焼刃の節出来る疵なり。

一、しみは、直刃にも有る事なれども多分亂刃打入たる所に出る多し又帽子の内にも出る者也、中略、此疵は多分焼過て少し滓心有て刃土滓立て其所へ大氣戻りてしみと成也、下略。

割れは月の輪刃切れの類何れも刃方は能く焼けども土下宗の方やけ兼る故出来る疵也最も土の塗方厚過たる物重ね厚き物にも有れども何れ鋼の強通たるに有る事也、扱て刃方は鐵薄き故火能く通れども水に入る時は又さむる事早し然るに地土厚過たるか、かさねの至て厚き物は土下に火

の通る事遅き故に未だ通り兼ねたるなれば水に入たるもさむる事遅くして刃方の早くさめたる所と相激して割れる也月の輪も同前也如此き加減なる時は反る事も至て強き故に刃切も出る也惣じて焼割は火加減に有と雖鋼の強過ぎたるに多き事也云々。

新古刀の疵及地刃の疵の可否

刀劔固癖録に

疵ノ事先代ヨリ數多ノ條目ヲ舉ゲテ其名ヲ分ツトイヘドモ鍛鍊ノ節打返ノ不合ヨリ出タルモノナリ尤顯ハレタル形ヲ以テ彼是ト號ケタルモノナリ此ニ依テ古劔ノ分ハ鍛ノ遍數多キ故ニ殊更多シ然レドモ刃切月輪水響等ノ大疵出來ルコト究テ有ルベカラズ古書ニ古刀ノ疵ハ可許新刀ノ疵ハ少シニテモ許スベカラズト云フ此寔ニ先人ノ眞見感服シテ懼ルベシ然時ハ新古ノ差別ヲ辨ヘザルニアラズ完ク時花ノ使然トコカ(一字不明或口カ乎)ノ及バザルトコロナラン凡テ疵ノ事ハ利用ニ害アラズ觀考シテ大概地ノ疵ハ可許刃ノ疵ハ許スベカラズ何トナレバ焼揚ノ時鐔ノ分ハ張發ス意味アリ因テ聊ナリドモ砌テ拔ケ兼ルモノナリ又無疵ナリト雖モ鍛ノ不足刀ハ大疵モノニ劣ルナリ能ク察スベシ。

即ち古刀は鍛鍊の數が多い爲疵も多いが大疵はないと云ふてあるをして古刀の疵はゆるしても新刀の疵は許し難いとし又地の疵は許しても刃の疵は許されぬと述べて居る尙無疵ものでも鍛の不足刀は惡いと云ふ。

新刀辨疑卷之一に

刃は物を斷を主とし敏して持忍べきにあらず地鐵は刃を抱へ堪ふるの力となる也しかれば刃の中の疵より地中の疵を忌むべし無疵の道具は稀なるもの也縱令始め無疵なるも後に顯る疵も有べし又顯はれたる疵を隠す術も數々有べし功者にあらざれば見分難し扱又樋彫物ある道具も劔

の全體闕なる意あるなれば地刃共に小疵のものは用ひて國用となすべし。

撰刀記に

刃にかゝりたる疵は半よりこしもとにあるはゆるすべし中より先の疵はものにふれては其きずよりかけなどすれども手元なるは其うれいなきことなりされども太刀は昔より半先より打れたるためしなく大くははゞきもとより折るゝなりこのことは古き戰の書を見ても知るべしされば地は本にあるをもゆるすまじきことなり。

此二説は前の説に反して地中の疵は刃の中の疵より悪いとして居る。

不折不曲と云ふことを刀劔の第一義とすれば後者の説に従つて置いた方が安全であらう。

個個の疵の取捨

新刀辨疑卷の一に

劔を鍛ふの務を思ふに其勞實に容易にあらず刃切靱脹刃稟以下却て切先の内横に縁ある疵は小さき迄も様子によりて許し難し諭刃切靱たりとも押て消べき疵は許し用ふべき事也残りたりとも弱りにならざるをば亦用ふべきなり庖丁小刀にも疵なきは稀なり況てや劔をや鐵の縁堅固に續て折ざる道具は随分ゆるすべし小疵の吟味よりは劔の肝要たる所を詮議有べき事也。

新刀辨惑錄二に

古作疵ハ凡地荒肌荒鍛割レ染ミノ類ハ場所ニヨリテ免スコトモアリ(中略)古作新作共ニ、シナヘ、刃ガラミ、脹、刃切レ等ハ免シ難シ(中略)古刀ハ勿論新刀ニテモ總テ地鐵ノ中ニ堅ニ有ル鍛ヒ割レ又ハ刃ノ中ニテモ、フクラヨリ下ニテ刃先ヘ二三分モ間ノアル疵ハ免シテ可ナリ横ニ見エル肌モ、シナヘ、フクレ、ノ類ニアラザレバ是モ免スベシ、尤根元ノ鐵ニハ肌ナシトイヘドモ折リ返シテハ幾度モ鍛エルコトナレバ其合セメ數多年ヲ歷ル中ニハ肌ハ勿論割レ等モ出ル筈ナリ(中略)鍛ヒ割レ地荒

レ墨籠等ハ免シテ可ナリ去レドモ棟ヘカ、リタル疵ハ横切ト認テ忌ムコトナリ亦新刀ノ疵ハ古刀ト違ヒテ少シノ疵ニテモ免シガタシ去レドモ業ノ構ヒニナラザル疵ハ免シテ可ナリ。

校正古刀銘鑑第三卷に

ゆるし難きは刃切棟切（研にてかくせしは其所ほかより研あらく見ゆ）しなへ、棟よりは鎬へまはりしは棟を削りて取らるほどならば取りて用ふべし刃のしなへ表裏通りし、くだけ、物打の刃がらみ、染ゆるすべきは地鎬のしなへ、菅蒲打中程より下の染刃がらみ、（建武前の備前物には必染あり所によりてなかるべし古き備前物は帽子の柔きも刀はゆるし來れり）ふくれ、烏口目ざはりなれどもゆるすべし切込は形と處によりて用捨あり荒割は疵にはあらず必あるべきものにて此ひとつもなきはいと得がたし作は劣ながら應永前後の備前物世に行はるゝは此故なり。

とある此等の他は前記の表により類集して左へ記す。

い、シナへ

A、しない、此ものをしないとは世にいへどもむなぎれにして打安し地にあるしないは是に次なりされど作風によりてはいとうまじきあり云々。（撰刀記）

B、鎬平にあるしなへは所により樋をかきしないの有りたけをとり又切込にして生れのしなへとれされは折れ疵にはならず少も残れば折れるものなり。（察刀規矩）

C、しなへ（棟にあれば少しにてもゆるさず）折疵とていむ事なり。（察刀規矩）

D、しなえ、少にてもゆるさず。（古刀銘鑑大全一）

E、シナへ、といふ疵之もいと惡き疵なり。（刀劔道標）

F、シナヒ、勿論廢物なり。（栢のはしら）

G、百足シナへ、一所に十も少もむかでの足の如く集りてあると云ふ多くはぬけかねるものなり樋

などをかきて所によりぬくるものなり。(新刀銘盡)

H、宗シナへ、むねにあるしなへを云ふ推てぬくるもあり又深もあり一ツ二ツのむねしなへは切込にして隠す事あり見分べし。(新刀銘盡)

I、刃ジナへ、刃金の上にあるをいふ也此疵淺きは推てぬくる事ありとも深きはぬけかぬるものなり。(新刀銘盡)

J、ジキシナへ、此疵刃の上地金の中にもあり尤所々にあるべし淺きは推てぬくる事あり。

(新刀銘盡)

K、燃シナへ、其所へ堅き骨筋あたればくじける事あるべし。(柶のはしら)

L、しなへ、折疵なりいさゝかにてもゆるさず。(刀劍雜話)

ろ、フクレ

A、ふくれ、折れ曲りの害にならず。(刀劍雜話)

B、ふくれ、外の事は劔師の術にして隠すものあり無疵の道具も劔て出るはふくれ也押てとるも有さすれば少の事は許す物かは深き淺きの程吟味すべく又外より出る事多し。(古刀銘盡大全)

C、ふくれ、是は見分惡しけれども折れゆがみのかまひにならず。(察刀規矩)

D、ふくれ、作によりてはいとふまじ。(撰刀記)

E、フクレ、刃近きは勿論廢物なり。(柶のはしら)

F、フクレ、といふ疵何程大きなか分明ならず且近年フクレを押へ直す事いと上手になりたるを歎き恐るべし。(刀劍道標)

G、フクレ、は地金刀金共にあり大なるあり小なるありわずかなるふくれは或は金あて或はたんばんを以て隠す術あれども上はわずかに見えて一重内に數々につゞきてあるあり是を津るべく

れといふ所つづれては次第に次へくうつりて破るゝものなり少のふくれとてゆるすべからず能々見分べし。(新刀銘盡)

は、刃ガラミ

A、刃がらみは太刀打のとき其處のみかけて飛までにて大きな害なし。(刀劔道標)

B、刃がしら、多少の事は許すべし。(古刀銘盡大全)

C、はがらみも其さまによりいとふといたはぬとあるべし、きづの小さきもおもてうらへあらはれたるはあしく然れ共それも半よりもとにいさゝかあるはいとはずして可なるべしさきなるも一度の勝負にはさまでいとふことあるべからず。(撰刀記)

D、刃ガラミは勿論廢物なり。(梶のはしら)

E、刃がらみ、是は刃こぼれぬけざるものゆえきらふ。(察刀規矩)

F、刃ガラミ、此疵ある大小求むべからず淺き刃がらみは刃を引てぬくる事あれども深きは刃を引ほど次第にまくれて一向にぬけざるも多し云々。(新刀銘盡)

G、刃がらみ刃もつれ、みなは本にあれば少しも免さず此疵炮じ直したるものに出来る事あれば此疵あるものは吟味すべし。(刀劔雜話)

に、地荒

A、地あれは、大かたの疵は業のさわりにはならざるものなりされどもあまりに多くて地の力にかはるはいとうべきなり地にはだあれあるも同じ。(撰刀記)

B、地アレ、ふかき地あれは各別大抵の地あれば古作にはゆるし來れりしかれども新作はゆるすべからず。(新刀銘盡)

ほ、地鐵ワレ

A、地鐵のわれ、鋼鐵のわれたるなどは鍛目なり素人のよく見ゆる故に疵の如くいふものなりさらに疵にあらず。(刀劔道標)

B、棟われ、立われ、大體はゆるすべし。(古刀銘盡大全一)

C、ひねの立われ、あるは大かたいとうことあるべからず。(撰刀記)

D、地の内の鍛割浅ければ嫌はず。(刀劔雜話)

E、地の内のきたい割、是は見分惡しけれども打ゆがみのかまひにならず。(察刀規矩)

F、宗ワレ、宗にたてにあるわれなり長く通りて深きもあり又浅きもあり近代疵直しと云ふものありて立疵のわれ目は別に金を入れて直す事あり。(新刀銘盡)

G、立ワレ、宗われに同じ深からずしてふくれのなきは大かたなほるものなり。(新刀銘盡)

H、宗の大割れは強く撃ときは開きて裂けるものなり。(柶のはしら)

I、立割れ、は字のみにも非ず刃の立割は彌々あしく刃計にも非ず刀の鐵の直に割れありて上よりは見えざるもありこれも又あし。(柶のはしら)

J、棟割れ浅ければ免す深ければ堅物を切れれば裂るとて嫌ふ。(刀劔雜話)

K、ふし、といふは地鐵の鍛の行合ざる物か不好也上作には有まじき事也。(古刀銘盡大全)

L、肌ふし、和らぎあれば嫌はず此疵しなへにまがうなれ共別なる物也。(刀劔雜話)

へ、ムメガネ

A、ムメ金、此疵、立われか或は少のすみこもりの所を金を以て埋る事あり新作などはいむべき疵なり古作は之をゆるす事と見えたり。(新刀銘盡)

B、うめかね、あるもの心よからざるものなれ共少きは許すべきものなりこのもの細く長きはよし巾廣きは忌べし埋金は物に強くふるゝときはひびきにて出ることあり。(撰刀記)

巾廣きは忌べし埋金は物に強くふるゝときはひびきにて出ることあり。(撰刀記)

巾廣きは忌べし埋金は物に強くふるゝときはひびきにて出ることあり。(撰刀記)

巾廣きは忌べし埋金は物に強くふるゝときはひびきにて出ることあり。(撰刀記)

C、むめかね、昔は不嫌其所疵の程計りがたきものなれば不好。(古刀銘盡大全)
と、石氣

A、石け、このものも數多くあらぬはゆるすべきなれ共刃先へよりたるはつよく物に當ればそれより損ずることあり。(撰刀記)

ち、スミゴモリ

A、是は見分惡しけれども打れゆがみのかまひにならず。(察刀規矩)

B、すみ籠、少の事は許すべし。(古刀銘盡大全一)

C、炭籠、折れ曲りの害にならず。(刀劔雜話)

り、鳥口、鳥ノ口

A、鳥口、此疵多くはぬけざるものなり大抵みつかしらの通りにあり。(新刀銘盡)

B、鳥ノ口、鳥口、凡て切先ぼうしの内の疵は必いむべし。(古刀銘盡大全一)

C、鳥ノ口、此疵裏表通りたるもあり又一方にあるもあり何れも求むべからず多くはぬけざるものなり。(新刀銘盡)

D、鳥の舌、折れ疵とていむ事なり。(察刀規矩)

E、ぼうしさきは棟平らにもわれあるは鳥ノ口と世に名付くる疵なりこのきづいさゝかなりともいとうべし大かたはかねのわきあはずして二寸三寸より五六寸の内にこもりあることあり少しなりとも此疵あらばあし。(撰刀記)

F、鳥ノ口、忌む疵なり。(刀劔雜話)

ぬ、月ノ輪

A、月の輪、折れ疵とていむ事なり。(察刀規矩)

B、月ノ輪必いむべし。(古刀銘盡大全一)

C、月ノ輪、此疵さはめて切先の裏表にあり至て深きあり又淺くして推てぬくるも有然共十に八九はぬけぬものなり裏表通てあるもあり惣じて月の輪ある道具を求むべからず俗に出月入月とて吉凶ありといへども信ずべからず兎角指料とすべからず。(新刀銘盡)

D、月の輪忌む疵なり。(刀劔雜話)

る、ハゼ

A、帽子のハゼは血戰に及びしとき切先にて強く打ときは帽子のハゼより一二分も欠て飛より外の恐なし。(刀劔道標)

B、ハゼとて切先に二すぢも三すぢもわれあるものありこの疵研を重ねるときは大かたとるゝもの多し刃先へわれ目いてたるは各別そんじやすし。(撰刀記)

を、シミ

A、刃のしみ、少の事は許すべし。(古刀銘盡大全)

B、しみあるものありこれはかた／＼なるは大かたゆるすべしそれも胖本なる裏表にあり共いとうまじきことなり此しみはよき物にもまれにはあるものなり鐵の沸すきたると又しんかねの出たるとの二ツよりしみは出くるものなり。(撰刀記)

C、トビ、シミ、所々刃の上にぼち／＼とあるをとびじみと云之等は事によりゆるす事あるべし。

(新刀銘盡)

D、シミ、此疵ある道具求むべからず刃しみしらしみ、油しみにえじみ、すべてのかざるものなり、しらしみ、など引ずりをかけ金あててのく事もあれ共先は求むべからず然共古作の、しみは事によりとびじみなどはゆるす事もあるべし新作は許さず。(新刀銘盡)

E、堪忍のなり難きはシミなり。(刀劔道標)

F、シミ、刃近きは勿論廢物なり。(栲のはしら)

G、刃シミ、刃先へ出てべつたりとしみたるを云也指料などに求むべからず。(新刀銘盡)

H、刃の上のしみ、是はよはけとてきらふなり。(察刀規話)

I、地刃のしみ弱けとて嫌ふ。(刀劔雜誌)

わ、刃キレ

A、刃切折れ疵とていむ事なり。(察刀規矩)

B、刃切れ、少にてもゆるさず。(古刀銘盡大全一)

C、いとうべきは、刃されなり。(撰刀記)

D、刃ざれ、此疵ある大小堅く求むべからず片刃切といふは片々にあるを云ふ、是は事により十に一つぬくる事もあり當時術有て研の上にて刃切をかくしおく事あり能々吟味すべし。(新刀銘盡)

E、刃切れ、折れ疵なりいさゝかにても免さず。(刀劔雜話)

か、刃キレ

A、刃切と云ふは焼刃のさかひの少にても切たる所有也分ち難くばすかしても見るべし燈火にては猶よく分るものなり地と刃との分ちのなき所有なり不好。(古刀銘盡大全一)

B、浮彩切忌疵なりにほひの切れたる所は刃鈍くして業なきなり脛巾本にあれば少しは免す。

(刀劔雜話)

よ、ハサミ出シ

A、はさみだし、といふは焼のなき所を焼ある様に金をあて刃金をむりに狭み出すを云ふ此疵を見るには道具を横にすかして能く見れば狭出しの所はうす黒く見ゆるものなりやき筋はしかと

あれども此疵ある大小は求むべからず。(新刀銘盡)

た、焼割及焼クヅレ

A、刃の内の焼割髪の毛の如く白く有るを云ふ是は、くだけ、とて甚だきらふ疵なり。(察刀規矩)

B、ヤキクヅレ、これは直刃亂刃ともにあり何れに依らず表裏共に焼の崩れたるを云これ一ツの疵とすれども出来に依り道具の品に依てゆるすべしあながちに指料の疵といふにあらず。

(新刀銘盡)

C、刃の内ひと、碎とて大小忌む疵なり、(刀劔雜話)

れ、矢目

A、矢目、といふは平に錐の先にて突きたる如きものあり戦場にて矢先のあたりたる跡なり疵にあらず珍らしき賞すべし。(古刀銘盡大全一)

そ、切込

A、切込これ又戦場にて切込たるなれば疵にあらず上作に十腰の内八腰九腰迄は必切込あり心部よりしなへを切込に直したるもありよく分つべし。(新刀銘盡)

疵を直すことに就て

刀劔目利書に

刀脇指疵ハ人體ノ病腫物ヤ姿細ル事老ニ同ジ疵ノ名多シト雖モ切レニ障ル疵ハ少シ衰ル事尤不可構然ルニ五六十年前キ比ヨリ疵直ス事ヲ業トシテ其價ヲ得テ世ノ産トスル者於大坂五郎兵衛六郎右衛門京都ニ夷川六兵衛此等初代ニシテ似銘疵ヲ直ス夫ヨリ於江戸モ又市ト云者右ノ業ヲ得テ手操ヲ盡シ疵ヲ愈シ研ノ手操ニテモ疵ヲ直シ隱人目ヲ昧ス(中略)古物ニ疵アル事多シ然ドモ切ニ不構顯シ置事實ニシテ宜シ今疵アルモノ少キハ直ス故也然時ハ畢竟不實ナレハ業ニモ可構

事歟疵ヲ直ス形察スル所後ニ詳ナリ。

一、月輪ハ帽子ノ嶺ニ在ヲ云刃強キ物ハ礪ニテ押取ル棟へ廻リタルハ不直也或ハ刃方ノ割ヲ半月ト云ヘトモ刃割ニシテ不嫌又ハ身ノ中ニ割在ル事尤多シ是モ亦不嫌事也何ノ世ヨリ嫌來ル事歟

一、刃味ノ名狀不可也煎色味ハ上作ニ多ク有テ其刃ノ景氣模様働キニシテ最所可詠也其外色味ヲ直ス事ハ鐵ヲ砥ノ貌ニ作り炭火ニ入炎ニシテ取出シ置テ其上工身ヲ載セ先後へ引時ハ刃ノ上柔カニ成ツテ色味消ユ然トモ刃ノ上甚タ融也是ヲ引磨ト云大ニ可嫌事也。

一、脹ハ每道具ニ多分有之物也礪人沈メ置事也是等ハ不苦其中筋惡キ大脹ハ目利ノ上可嫌島疵又ハ樋ノ内底ニ有疵ハ皆脹ノ壞レタル也。

一、可忌疵ハ刃切大颯灑菖蒲打大刃搦大埵棟切淵切打繼沸繼廻物引磨鑷出反出寸延是等色々手苦勞シテ操タル物決シテ不可用也。

一、廻^マ物トテ切先キニ刃絶タル物ヲ先折ツテ横手ト刃強キ所ヲ見立前キニ記ス引磨シテ刃ヲ柔棟ヨリ肉ヲ取刃ヲ棟方へ廻シ切先ノ貌ニ作ル也棟方ノ歸刃ナキ物也又刃絶タルモノハ礪ニテ刃根如有之ニ捺ル也(燒直し物に就ての報告参照)

一、刃切ハ礪ニテ膚付隱ス小キ刃切埵ハ如釘貫ナル鐵ヲ炎ニシテ其疵ヲ鑷出時ハ地鐵延テ其疵ト^ルル也右釘貫ナル鐵ノ炎ニシタルヲ刃淵へ懸ケテ鑷時ハ淵切トナル礪ニテ隱シ又ハ引磨シテ先後ヲ取合ス盈モ又刃切ヲ鑷出ス如クスルトキハ虧目ムマル也菖蒲打ハ刃上踏不立故礪ノ手操ニテ押取棟颯灑同意也鎬内へ深ク入タルハ不及手操大颯灑イ錯ノ以棟直ストイヘトモ底不直刃搦ハ喜盈レニシテ紛カス下略。

前田延春の曰く

しなへある道具を鑷にて切目を入れ樋にて兩方よりうちあはせ其上を研てかくす或は切込とな

しまた輕きは硯針の先にてつゝき地あれとなし又は藥を敷て打となす。
ふくれる銅を焼て押へ見付を紛らす是も破れたるは押へてもおもひ合ず又彫にて疵隠せど後彫は時代とり合ず下略。

刀劔根問草に

前文略打疵のしなへ地鐵にあれば其上へ堅さまに鑿を二筋三筋品よく打込鑿枕を直し勝手に來る方へ立て置き又其邊へ針をも色々に數打廻し其側より横疵の堅に見ゆる様に鑿枕を槌にて打ち寄ればしなへの上へ種々に屈曲して鍛肌或は堅肌とも見ゆ又しなへに續けて模様を外へ引き捨て或は引廻し鑿目をしなへの上へも斜に打ちて叩き廻せば丸くも角の流れたる様にも鍛肌と見ゆる也又棟角のしなへは棟より堅に鑿を入れて疵を平へ追ひ出して其膨たる所計を摺除て鑿目は峯割にみする事もあり口明たる割を寄せる事もあり其外手術こそあらめ皆上口直しにて底は本の打疵其儘也兼て疵を知りて直したるを見る時は古刀は其細工せしあたり新刀の地合になるなれば見て分るべし鑄より棟は磨きたれば猶見にくし又棟鑄などのしなへは鑿を斜に打ちて切り込と見せて隠すもあり其外脹ある上にタンパンを一時附け置きて押し付けて上仕立をすれば一兩日は其儘沈みて居るもの也下略。

鍛記餘論に

ふくれあるは其さまによりて銅の小板を當て上よりはさみを焼いてつよく押へてふくれを押付けて見えざるやうになくし又破れたるをば其所を削りしてたがねにてうちならしてかくすことをばするなり又しないをも其所をほりて左右よりたがねにてよせ硯にてむらを直すことをばするなりよく直りたるははだしなごとかく見ゆるも有なり又たてにあるきづは大方よせてはだの如く見するにかくしつゝもかくしかねたるは其所をほり取りて埋金ををしてまぎらし疵をば

かくすなり又むねの角にあるしなへは切込のあとゝ見せて紛らかすことをばするなり又よするによりかぬる疵をば所によりては樋をかき切物などしてかくすは常のことなり。

終りに引用した刀劍書の題名をかゝげて置く。

古刀銘盡大全、校正古刀銘鑑、新刀銘盡、新刀辨惑錄、新刀辨疑、刀劍固癖錄、刀劍或問、刀劍雜話、刀劍道標、刀劍根問草、密刀規矩、劍工秘傳志、撰刀記、鍛記餘論、招のはしら、前田延春の説(失題名)

山西省北端の富源

八木武三郎君談

余は約一箇月半を費し支那各地を視察したのであるが上海、武昌、天津方面は今日に至るも依然として日貨排斥運動が持續されて居る、中にも上海、武昌は最も猛烈なる勢を以て日貨を排斥して居るが、上海城内の如きは甚だ危険で、領事館から出入を禁止して居るので、一人の日本人の姿も見なかつた、武昌などでは悉く日本人には密偵を附けさせて居る、隨て全く鎖國情態を呈して居る、之は日支兩國の交際上甚だ憂慮すべきことである。

支那の富源に就ては、兎角交通の不便である處からして日本の事業家は未だ足を踏入れて居らぬ所もあるが、曾て滿鐵會社が獨逸人の手から買収せんとしたことのある山西省の北端に在る石炭山の如きは最も注目すべきものである、京漢鐵道沿線張家壓、太原間は鐵道線路の兩側は、山間の切割を見ると石炭層の露出して居る程の豊富で、此地方では粉炭は採掘せず總て塊炭のみを採掘して居るが一日に半の背中に左右漸く二個を積載する位の大きな塊炭ばかりであつたのは、物珍らしく感じたのであつた。

山西省の炭層は、山間部から平地に廣がつて居るが其數量は二億噸以上と稱せられ、全く世界第一の炭層であるが殆ど手が附かないで居る、太原附近の採炭は、先年獨逸人が經營して居つたが其頃滿鐵會社との間に買収の交渉はあつたが交渉半ばにして世界戦争が始まつたので、話はそれ切りになつてしまつた、目下は支那政府に於て之を經營して居るけれども、頗る小規模のものである、斯る世界第一ともいふべき大石炭鐵を持て居りながら、今日まで手を附けずに居るのは、燃料問題の盛んな今日此頃甚だ遺憾と云はねばならぬ。